

サモアの人々と生活

北野元生

南太平洋海域の地図を開いてみよう。サモア（旧国名は西サモア：1997年7月4日付けで、国名を西サモアからサモアに変更した）は地球の南半球に位置し、日付け変更線のすぐ東側、または日付け変更線の西のはずれに当たる。したがって、世界で一番最後に日が沈むことになる。日本との時差は20時間、あるいは別の言い方をすれば4時間と言うことになる。

太平洋海域は文化的人種的に大きくミクロネシア、メラネシア、ポリネシアの三つの地域に分けられるが、このうちポリネシアとはハワイ、ニュージーランド、イースター島を結んだ広大な三角形の内側の地域で、サモアはこの三角形の左の辺（左辺）の中央に位置している。

元来ポリネシアの人々は東南アジアに起源を有し、民族移動によって形成されたと考えられている。サモア諸島はしたがって民族移動の際の玄関口と言える島々であり、西方からやってきた人々はまずここを通過して、広大なポリネシアの島々へ散っていったと考えられている。いわばサモア諸島はポリネシアの第二の故郷なのである。

ここに言うサモア諸島とは、サモアと東サモア（米領サモア）を含んだ一群の島々を呼称する名称である。サモア諸島がはじめて西洋諸国に紹介されたのは1722年オランダ人ロッグヴェンによるとされているが異論もある。その後何人かの探検家の訪問を受けたが、実質的にサモアの歴史が記録されるようになったのは1830年ロンドンのキリスト教宣教師ジョン・ウィリアムスのサバイ島上陸定住以降である。その後この島々の領有をめぐるドイツ、アメリカ、イギリス等の介入や対立を経て、1900年西サモア（現・サモア）はドイツ領となり、1904年東サモアはアメリカ領となった。西サモアは第一次世界大戦でドイツが敗れた後、国連委任統治領としてニュージーランドに領有された（1919年）。第二次世界大戦後は西サモアはニュージーランドの信託統治国となったが、1930年代から芽生えていた民族独立運動は第二次大戦以降次第に高まり、ついに1962年1月1日をもって独立を達成した。なお、1970年に英連邦に加盟、国連に加盟したのは1976年であった。1997年7月4日に国名を西サモアからサモア（サモア語でSAMOA、英語で The State of Samoa）に変更した。

サモアはウポル島（1,075km²）とサバイ島（1,650km²）の2つの大きな島と7つの小さな島々からなっている。総面積（2,831km²）は東京都の1.4倍、淡路島の5倍に相当する。人口は1994年現在約16万4千人でそのうち13万人がウポル島に住んでいる。首都はウポル島にあり、一般にアピアと呼ばれている（APIAとはサモア語で首都を意味している）。アピアの人口は3万4千人である。と言っても、この国では地方自治制はしかれていないので、州、県、市、町、村などはなく、厳密にはわれわれの理解するような首都ではない（首都地域とでも言うしかない）。都市人口率は21.2%である。

公用語としてサモア語と英語の二つが用いられている。全ての公文書は両国語で印刷され、国会の質疑応答も互いに同時通訳される。日常会話はほとんどサモア語が使用され、酋長会議などはサモア語のみでおこなわれる。商取引などには英語が使用される。多くのサモア人は英語を使うことができる。サモア語は独自の文字を持たず、ローマ字表音が採用されている。日本語とおなじで、一つの子音のあとには必ず母音がつくので、日本人には発音しやすいし、文法もそれほど複雑ではないと言われる。

サモアは島国であり、全ての島は火山島であるが現在活火山はない。最近の噴火は1911年（サバイ島）である。ウボル島とサバイ島の最高峰は1,116メートルおよび1,856メートルである。最近噴火があったサバイ島では大規模な溶岩が「黒い原野」をつくっている。土壌は一般に肥沃である。島々の周辺は保礁によって囲まれており、海岸線から珊瑚礁の先端までは平均2 kmほどである。一部で溶岩流のため海岸線とほとんど一致する。河川は多いが、いずれも短小で水量は少ない。典型的な熱帯性海洋気候で、年間を通じて高温である。年間平均気温は26-27度で平野部で20度以下に下がることはない。明確に乾期と雨期に分かれる。例年5月から10月は雨が少なく、空気は比較的乾燥している。11月から4月までは湿気の多い雨期である。1週間に一度も日の目を見ない日が続くことさえ稀ではない。年間降水量は2,800-3,000mmである。

住民のほとんどはポリネシア系のサモア人で、肌は褐色、毛髪はほとんど直毛で黒い。ポリネシア人は先述のように、東南アジア方面から移住してきたというのが定説になっており、外見は日本人に近く親近感をおぼえる。しかし骨格は大きく筋肉の付きも良く、思春期を過ぎると急速に太る傾向の人が多く、確かめた話ではないが、元大関の小錦や横綱曙については彼らの出自がサモアであり、1-2代前にハワイに移住したとの説がある。西欧系との混血も少なくなく、彼らは都市部に住み、官界産業界で活躍している。華僑も一頃かなり多くいたが、今はサモア人との混血も進み、純血華僑は少ないという。彼らも各分野で活躍しており、華僑意識に乏しいのが特徴であると言う。居住する外国人は約2,500人、ニュージーランド人、オーストラリア人、アメリカ人、ドイツ人、日本人の順番である。因みに日本人は84人（長期滞在68人、永住16人；1995年）である。

一般に太平洋地域の動物相は貧弱であるが、サモアもその例外ではない。哺乳類はウシ、ブタ、ウマ、イヌ、ネコ、コウモリなどにつける。コウモリ以外は帰化動物である。猛獣などはいない。爬虫類両生類も種類に乏しく、たまに海へびをみる程度である。鳥類は豊富である。植物相は典型的な熱帯雨林で、層をなした樹冠のジャングルが繁る。樹類はラワン、アピトン系およびイチジク系が多い。帰化樹木としてチーク、ゴム、モンキーポットなどがある。草木は年間を通して美しい花をつけ、ハイビスカス、ブルメリア、ブーゲンビリア、ランなどが咲き競う。時にサイクローンに襲われることがある。中でも1990年のそれ（Cyclone Ofa）による被害は大きかった。多くの家屋や施設が崩壊し、1万人の人々がホームレスになった。被害総額は30億サモアドル（タラ）以上と言われている。

サモアの社会の基盤は酋長制度にある。酋長をマタイ（MATAI）と言う。マタイは「村長」の

意味あいだけでなく、人権や財産権に直接関連するものである。サモアの社会構造の最小単位はアイガ（AIGA）と呼ばれる拡大家族で、その長がマタイである。アイガでのマタイの権力は絶対で、マタイの承諾無しには財産を処分したり、婚姻することは許されない。アイガの財産はその構成員たる人を含めて全てマタイに属している。20ないし50のアイガが「村」を構成し、そのマタイが「酋長会議」を組織する。

マタイにはそれぞれに名前があり、ヌアフア（NUAFAA）と言う。ヌアフアそのものに高低の地位序列があり、後に述べる国家元首のマリエトアというヌアフアは最高位の大酋長の位階である。ヌアフアにはそれぞれ土地がついている。したがって、マタイに就任することは土地を取得することをも意味する。もっともそれは土地の所有権ではなく、占有権とか共有権である。本人がヌアフアに在位している間は土地を自由に利用できるが、売買することはできない。ヌアフアの継承は世襲になることが多いが、原則は一代限りである。マタイの就任はアイガの推挙により酋長会議で承認される。しかし、これには土地という財産問題がつきまとうので、しばしば紛糾する。その解決のために「土地および酋長位裁判所」が設けられている。村ごとに組織されている酋長会議はその村の意志決定機関であり、その決議は不文律の条例となる。犯罪や民事に関する裁判も行われ、村からの追放やブタヤイェトガ（パンダナス製のマット）などの献上罰が科せられる。政府の道路建設のための土地の収用やヤシの木の伐採なども酋長会議の合意を待たなければならない。

サモアの土地は4つのタイプに分けられる。その種類と面積の割合は慣習地77.5%、国有地14.4%、農業公団有地4.4%、自由地3.7%である。全国土の大半を占める慣習地は酋長の称号に属し、売買譲渡はできないが、30-60年の長期貸し付けは可能である。売買できる自由地の面積は少ないが、需要が限られているので地価は安定している。アピア近郊の住宅地で3.3㎡当たり30米ドルである。外国人は原則として土地は所有できない。外国法人は所定の手続きを経れば可能である。

国家体制としては立憲君主制をとっている。首長は国家元首である。現在はマリエトア・タヌマフィリ二世（MALIETOA TANUMAFILI II, 1963年即位）が国家元首（終身制）である。彼の逝去後は憲法により国会が次の国家元首を選出する。首相は国会で選出される。国会議員の中から8名の大臣を指名して、内閣を組織する。国会は一院制で、49議席からなる。うち47名は細分された選挙区から選ばれる。残りの2名は非サモア人で全国区で登録された混血有権者により選ばれる。国会議員の任期は3年間である。複数の政党があるが、いずれもイデオロギー集団ではなく、いわゆる派閥である。国会議員の被選挙権はマタイにしかない。選挙権も最近までマタイにしかなかったが、1991年よりは21歳以上の全ての男女によって選挙が行われるようになった。但し、独立以来総選挙のたびにマタイの数が増えてきたなど、このユニークな身分制度は変容を余儀なくされるのではあるまいか。

東サモアを含めたサモア諸島は元来一つの国であり、古来一人の王によって支配されていた。サモア人は誇り高い民族である。他国に先駆けて独立を勝ち取ったのが、良い証拠である。したがって、外国からの不快な干渉は許されない。国民の多くは裕福とは言えない。産業その他の立ち後れ

は誰の目にも明らかである。酋長制度は後進的で野蛮な制度であると言うのはたやすいかも知れない。しかし、これはこの国の文化であり伝統であり、したがって法も介入できない秩序である。何人といえども、これを犯すことは許されないであろう。何人も彼らの生活の不合理さ（ここで言う、不合理さとは西欧的価値観にとらわれている人から見た不合理さをいう）を笑うことはできない。

通貨の単位はタラ（TALA, WS\$）、補助貨幣はセネ（SENE, "s"）で、いずれもドル・セントがサモア風に訛ったものである。1996年3月のレートで、1米ドルは2.50WS\$に相当した。紙幣では、2、5、10、20、50および100タラ札が、硬貨では、1、2、5、10、20および50セネが発行されている。

サモアは他の南太平洋島嶼国に先駆けて独立したが、それは多分に政治的民族的世論の盛り上がりによるものであり、地域経済の独立に伴われたものではなかった。国の財政は常に大きな負債を抱え、毎年歳入の多くの部分が先進諸外国（ニュージーランド、オーストラリア、日本など）や国際機関の借款と贈与に支えられている。国民総生産は1.6億米ドル（1994年）、一人当たりの国民総生産は970米ドルである。

サモアは農業国であり、農業が国家経済にとって大きな比重を占めている。産業人口の60パーセント以上が一次産業に就業している。農地は国土の43パーセント（12万ヘクタール）、で森林の47パーセントに匹敵する。ヤマイモ、タロイモ、ココナツ、パイナップル、バナナ、コブラ、ココア、パパイヤ、マンゴー、パッションフルーツなどが豊富に採れるが、本格的な輸出は行われていない。ウマ3千頭、ウシ2万6千頭、ブタ1.8万頭が飼われ、牛乳1千トン、鶏卵200万個、蜂蜜360ガロンなどが年間の生産高である。

林業は1967年ウポル島において、日本との合弁会社「ニューサモアインダストリー社」によりはじめて本格的に開始された。現在数カ所の製材所で国内の需要の99%を自給している。

サモア周辺の海域はカツオ・マグロの好漁場であり、魚の資源は豊富である。隣の東サモアには、日本の業者の開拓により古くからマグロ基地がひらかれ、活況を呈しているが、サモアではまだ本格的漁業の実現を見ず、自家消費の漁業の域をでない。漁獲量は年間1千6百トン（1993年）である。

サモアは新生火山の地質的な性格上、いわゆる有用鉱物や石油資源はないとされている。

政府は1965年「企業振興法」を制定して、とくに工業を奨励してきたが、原料や市場の面での障壁が多く、立ち後れが目立っている。コブラオイル、ビール、タバコ、マッチ、ビスケット、コーンビーフ、清涼飲料水、ゴム製品、飼料、製材などである。1991年ヤザキサモア社が設立されて、1500人のサモア人が就職し、車の電線やワイヤーハーネスをつくっている。なお、1993年現在、日系現地法人数は7である。

観光産業は特筆すべきものがある。サモアは南太平洋の中でも、もっとも良くポリネシア文化の原形をとどめている島々であって、最近とくに注目を集めている。風光明媚な海と島々、快適な常夏の気候、おおらかで人なつつこい人々の気質などはそのまま貴重な観光資源である。島々の道路

や交通は程良く整備されており、山、湖、瀧、ビーチ、村々など観光行楽に事欠かない。近年とくに西サモア政府も観光客誘致に力を入れている。サモアを訪れる人々の総訪問者数は年間で4万7千人（1993年）で観光収入は2千万米ドルである。国別では、東サモア、ニュージーランド、オーストラリア、アメリカ、ドイツの順で、日本はまだ836人（1995年：西サモア政府の公式発表）である。忘れてはならない事項を一つ述べておこう。「宝島：Treasure of Island, 1882」や「ジキル博士とハイド氏：The Strange Case of Dr. Jekyll and Mr. Hyde, 1886」を著したイギリスの作家ステューブソン（R.L.Stevenson：本名 Robert Louis Balfour, 1850-94）は19世紀末に南太平洋の島々を歴訪した後、安住の地をアピア近郊に定め、ついにサモアの土となった。彼の旧邸は国家元首の公邸として使用されていたが、現在では博物館になっている。ステューブソンの遺体は遺言により邸宅の裏山バエア山（VAEA）の頂上に葬られ、アピアの全景を眼下に見おろすこの墓地は観光名所の一つである。アピアから車で約10分、急坂の山道を徒歩約40分の行程である。アピアの中心部に日本の民間の資本（北野建設）で経営しているホテル（HOTEL KITANO TUSITALA）があるが、ツシタラ（TUSITALA）とは語り部のことで、ステューブソンのことを島の人々がそう呼んで親しんだ名残りである。

年間輸出総額は4百万米ドル、輸入総額は8千万米ドル（1994年）で貿易収支は大幅な赤字である。うち、日本への輸出は108万米ドル、日本からの輸入は2千7百万米ドルである。コブラ、バナナ、木材、自動車部品などを輸出する。相手国はアメリカ、ニュージーランド、オーストラリア、日本の順である。ニュージーランド、オーストラリア、日本からの援助と借款、出稼ぎ労働者からの送金、観光収入などで赤字を埋める。労働賃金は平均的時給で1米ドル、国家公務員の年収は350米ドルである。

銀行について触れておこう。Bank of Western Samoaは独立前から営業を続けており、中央銀行の役割も兼ね備えている。サモア政府とANZ Banking Groupの50/50の合弁会社である。ほとんどの日本の都市銀行と米ドルのコレスをもっているが、円勘定のコレスは東京銀行とさくら銀行だけである。10年前にできたPacific Commercial BankはBank of HawaiiとWestpac Bank（オーストラリア）および地元資本の合弁である。ほかにCentral Bank of (Western) Samoaとサモア開発銀行がある。筆者の印象としては、商業銀行の金利は1994年当時かなり高いと思ったものだが、現在ではどうであろうか？

サモアはほとんどの西側先進諸国と国交を結んでいる。とくに旧宗主国のニュージーランドとは友好条約を結ぶなど密接な関係が続けている。オーストラリアがこれに次ぐ。サモアに公館を設置している国はニュージーランド、オーストラリア、アメリカおよび中国で、日本を含む他のほとんどの国々はニュージーランドの大使が兼轄している。サモアの在外公館はニュージーランドとアメリカ（国連大使を兼ねる）およびベルギー（対EC）に設置されている。

国際機関としては、国連開発計画（UNDP）、世界保健機構（WHO）、国際通貨基金（IMF）、欧州連合（EU）、アジア開発銀行（ADB）などがアピアに事務所をおき、人材を派遣している。

サモアはキリスト教を国教と決めているが、同時に信教の自由も保障している。しかし住民のほとんどはキリスト教の信者である。キリスト教の伝来は1830年ロンドンのミショナリーソサイティーの宣教師ジョン・ウィリアムスのサバイ島定住に始まるとされている。今日、南太平洋でサモアほどキリスト教の布教が成功したところはないと言われている。キリスト教の教会はどれも立派である。プロテスタント系49%、カソリック系45%、のほかメソヂスト派やモルモン教などがある。

教育の普及には官民一体で力を入れている。文盲率は低い。95%がサモア語を読み書きし、60%が英語を理解する。学生はニュージーランド方式で、小学校（185校）、中学校（45校）、高等学校（15校）がある。多くは国立、一部はミッション系私立である。村落部では村が学校を建て、国が教師と教材を準備する。大学はフィジーに本部をおく南太平洋大学（University of South Pacific）の農学部と、サモア国立大学（National University of Samoa）がある。国立大学は最近設立されたもので、今はまだ教養部だけの2年制で、卒業生はその後南太平洋大学やニュージーランドやオーストラリアなどの大学へ国費留学ができるシステムになっている。政府は国立大学を4年制にすべく検討している。

男性の日常の服装はラバラバ（LAVALAVA）と呼ばれる腰巻きに上半身は裸あるいは軽いシャツである。正装はイエ・ファイタガ（IE FAITAGA）と言うポケット付きのラバラバにワイシャツ、ネクタイ、そしてブーツまたはサンダルを履く。女性はラバラバにブラウスが日常の服装であり、正装はプレタシ（PULETASI）と呼ばれる裾丈の長いブラウスに巻きスカートのツーピース、そしてハイヒールの靴。未婚者は左の耳に、既婚者は右の耳にハイビスカスやプルメリアの花を飾る。都市部ではズボンやスカートを履く人も多い。主食はタロイモ、バナナ、パンの実、そして米である。米はオーストラリア米が輸入されている。ブタ、トリ、魚などが蛋白源である。ウム料理が有名である。焼き石でタロイモの若葉でくるんだタロイモやタマネギに上記のものなどを蒸し焼きにしたものである。15年ほど前から、キッコマン醤油とワサビで食べるサシミが流行している。生魚をココナツクリームをつけて食べる方法もある。

住居は屋根と柱だけで壁のないファレ（FALE）が一般的である。ファレとは建物の意味で住居だけを意味するものではないが、壁のない家々が続く風景はやはりびっくりする。最近では西欧式の家屋も増えてきている。

ウポル・サバイ両島のほとんどに電気が通じている。電気の供給に関しては日本の援助が大きかった。村落部では簡易水道を引いている村もあるが、多くは雨水タンクや河川や湧き水に頼っている。アピアの水道はフランスの協力で設置されたが、充分機能しているとは言えず、時に濁ったり断水することもある。アピア地域ではトイレは水洗化されているところが多い。

電話は比較的普及している。1991年の統計では100人当たり2.5台である。国際電話やファックスもダイヤル直通である。電話料金は安い。村落部への通信は電話のないところでは、国营ラヂオ放送に電報番組があり、重宝されている。航空便は届くのに10日前後かかることがある。配達はなく、私書箱または局留めになる。ラヂオは国营放送がサモア語と英語で放送している。夜の聴取率は90

%である。日本の短波放送が受信できる。テレビ局はないが、1994年の時点で近々国内でもテレビ局を開設すると聞いていたので、現在放送が行われているかも知れない。東サモア局の番組と衛星放送が視聴できる。1993年の統計によれば、1,000人当たり39台の割にテレビ受信機が普及している。

医療事情について少し述べておきたい。サモアの厚生省（Department of Health）の Annual Report 1988 to 1990によるとサモアの医師は52人で、単純計算では、人口3064人に医師一人の割合である。しかし、医師52人のうち、14人は卒業研修などで国外在住であり、高齢のため現役から退いているものも少なくない。因みに55歳以上が48%を占めている。7人は開業医であり、31人は厚生省直轄の国立病院 Samoa National Hospital（290床）に所属している。看護婦は257人で、大多数が国立病院またはそのブランチに勤務している。歯科医師数は6人で、うち5人は国立病院に属している。

病院は厚生省直轄の Samoa National Hospital とそのブランチが全国を管理している。村々におかれたブランチの多くは看護婦は常勤しているものの医師は掛け持ちで一週間のうち決まった時間しか滞在しないことが多い。上記国立病院は総合病院で各科を有するものの、医師・看護婦は不足しており、国民の全疾患をシェアすることはなかなか困難であるようである。1990年の統計によると、国立病院で扱った患者の内訳であるが、インフルエンザ6,739人、胃腸炎1,147人、結膜炎372人、下痢869人、幼児の下痢1,021人、デング熱60人、チキンポックス50人、リュウマチ熱16人、魚の中毒17人、赤痢36人とある。手に負えない患者などはニュージーランドの大病院へ紹介することも稀ではない（52人、1990年）。国立病院の入院患者の病名であるが、肺炎およびインフルエンザ、腸管の感染性疾患、慢性閉塞性肺疾患、未確定診断、出産時の合併症（新生児）、悪性腫瘍、妊娠合併症（妊婦、頭部・頸部・体幹部の外傷、不明、食道胃腸疾患の順で、741人から241人の間で列記されている（1990年）。死因では、心疾患、自殺、脳血管障害、悪性腫瘍、腸管感染性疾患、他の細菌感染症、不明死、高血圧症、内分泌疾患、慢性閉塞性肺疾患の順で31人から5人の死因としてあげられている。1988年から1990年の、年間死亡率は人口1000人中、4.9から4.3人である。自殺死の原因の3分の2は農薬であった。

われわれにとって奇異に感じたことは、成人の肥満症と小児の低栄養に対するヘルスケアが国家的大事業であったことである。また、熱帯特有の疾患、たとえば蚊が媒介するフィラリア症などは、WHOの努力もあり1994年の時点で新しい患者の発生はほとんどなくなった。

われわれは1993年と1994年にウイルスの調査でそれぞれ2週間、アピアに滞在した。われわれの調査では元来ポリネシアでは極めて少ないと言われていた成人T細胞白血病の原因ウイルスである HTLV-1の浸淫はこの住民にも全く見られなかった（0人/約2000人中）。一方B型肝炎ウイルス HBVの浸淫は高く、これは隣のトンガ王国（やはりポリネシアに属す）と同様であった。このことは民族の形成や移動を考える上でも非常に興味深い。但し、HBVについては何らかの対策が必要であろうと思っていた矢先、サモアでは1995年からHBVのワクチン投与に踏み切ったとの

ニュースが届いている。なお、サモアでの平均寿命は男で65.95歳、女で69.21歳である（1990-95年統計）。

サモアは小国でもあり、看護婦養成学校以外のサモア固有の、医療従事者養成機関を持ってないことが頭痛の種であろう。医師歯科医師などは全て国外で教育を受け、ライセンスを取ってこなくてはならないのである。より高度な卒後教育なども全て外国に負っているのである。医療器具や医薬品などについては、その多くを西側先進諸国からの援助に頼らざるを得ない。JICA から2年間（1993-94年）、シニア・スペシャリストとしてこの病院歯科に派遣されていた神戸市在住の大迫勝義医師に現地で直接会って、話をきく機会があった。養成機関の欠如に起因すると考えられる医療現場の混乱について、悩みを訴えられていたのが印象的であった。

そろそろまとめを述べなければならない。本小文は南太平洋の島嶼国であるサモアについての概略を、項目別に総花的に述べたに過ぎない。数値などについては下記の本などを参考に可及的に正確を期したつもりであるが、思い違いや思い過ごしなどのため、あるいは筆者の力不足のために重複や嘘の記載をしてしまったところもあるかも知れない。おおかたのご寛容をお願いするばかりである。

現在サモアと日本との関係は極めて良好であり、既に述べたような産業商工業の分野は勿論、サモアから留学生を引き受けるなど、文化学術領域においても官民を問わず広く関係を深めている。このような良好な関係は将来ともに維持しなければならないであろう。最後に、東サモアについても書きたいことは少なくないが、米国とサモア間の政治問題の機微に触れるであろう事柄も多く、とても筆者の良くするところではないと考えたので、あえて全てを割愛した。

以上の小文は旅行会社の宣伝用のパンフレットであるパシフィックインターナショナル株式会社編「西サモア8日間の旅」1993年（東京）を同社の許可のもとで、下敷きにして書いた。筆者らは1993-94年の2年間に亘って2度、2週間ずつ現地に滞在したが、その折に直接見聞きしたことをつけ加えたことをお断りしておきたい。ほかにデータオブザワールド（世界各国要覧）vol 9, 1997年 二宮書店（東京）と The Far East and Australasia, 23rd ed. Europa Publication Ltd. London（1992）からより詳しい最新の統計数値やインフォメーションを得たことを付記する。

国名が西サモアからサモアに変更されたニュースは本小文を書いている最中（1997年9月29日）、パシフィックインターナショナル株式会社の松田氏から得たものであることを付記する。

（おわり）